

はじめに

近代以降、歌人も読者も、作品の中に人間を求めようになった。自然詠に関しても、たとえば伊藤一彦の言うように「自然や季節をどう掌握するかの問題は、そのまま掌握する側の自己の問題に他ならない」（『歌壇』1987年10月）と認識されるようになった。換言すれば、自然は歌人がその感情や思索を問う場になったのだが、それは人間中心の観点から自然を解釈するという点でも、自然を人間の心の受け皿にするということでもない。対等の緊張関係の中で、お互いの存在とその意味を発見しあう作業をすることである。築地正子（1920—2006）が70余年の歌歴の中で脈々と詠み続けた自然詠は、孤独な魂と自然との鮮烈な交感の歴史と言えよう。小論では、彼女の遺した5冊の歌集それぞれから作品を抜粋し、その軌跡について考察したい。

1 断絶からの出会い

築地正子は「地方のまた地方の田園地帯」（『歌壇』1993年6月）と自ら記している熊本県玉名郡長洲町に、26歳の時に東京から両親と移り住み、82歳までを過ごした。晴耕雨読、と言えば耳当りは良い。が、農村での暮らしは自ら望んだ道ではなかった。画家になる夢を諦め、東京の生活を諦めた彼女は大きな断念をもって田園生活に入ったのだが、しかし、その断念の深さと自然との出会いによって、彼女自身の言葉を借りれば「歌の恵みも大きかった」（『花綵列島』）のである。

東京に生まれ育った築地正子は、熊本において初めて自然と出会ったと言って良いだろう。彼女は「自然のたまもの」と題した文章の中で、「同じ自然の輪廻の中で共存しながら、あの儘、東京ぐらしを続けていたら、決して味はへなかつた自然との出会いが、私に、細く永く短歌を作り続けさせる原動力になつてゐる様な気がする。」（『短歌研究』1984年3月）と述べている。が、その熊本の自然は、彼女にとって最初から親和的なものでも、易々と人間の理解の領域におちるものでも、まして慰藉でもなかった。築地の第一歌集『花綵列島』の巻頭から二首目の作品、「はにかみて野の鶯の啼く声にわれのうたはぬ歌を聴きつつ」に、私はそれを強く感じる。無垢な鶯の囀りを「われのうたはぬ」歌と聞く時、作者と鶯の間には明らかな隔りがある。自らの心の世界とは異質のものに対する、拒絶に近い作者のかなしみのようなもの感じられる。

この一首は「聴きつつ」と言いさして終えられているが、続ける形で巻末歌「卓上の逆光線にころがして卵と遊ぶわれにふるるな」を思い合わせると、『花綵列島』全体に通じる断絶感が顕れてくるようだ。後者は佐佐木幸綱が「孤高の歌人」（『築地正子全歌集』）と呼ぶ築地作品の中でも、強烈な孤絶や孤高の精神の結晶として知られている一首である。「卵」は果たせ得なかった希望の比喩と見られるが、他者を厳しく拒む彼女自身の姿も殻の中に閉ざされている。野の鶯と屋内の彼女と、近くにいなながら二者の世界は断絶している。そしてこの時点では、彼女の側の余裕の無さや己を追いつめる孤独感が際立つ。

2 生の現実と矜持

築地正子は、自然風土や動植物に易々と表面的なレベルで馴れ合うことをしない。常に対象の持つ命や存在の深い部分に切り込む歌い方をしている。これは『花綵列島』以降すべての歌集に見られる傾向である。周囲の動植物や昆虫、鳥類への彼女の眼差しは、安穩ではない生の営み、光と翳ならば翳の部分に向けられている。

明暗の交叉するとき森の雪人を容さぬ禽の眼に遇ふ （『花綵列島』）

戦ひに敗れしものは野に死にき百舌の世界の事なりながら

死にきれぬ青蟻螂が霜枯るる草生の中ゆ歩みいでたり

一首目、この「禽」は野の鳥である。寂しさに敏感な人間の心の弱さや甘えを撃つような、硬質の野性に遇った一瞬。二首目における自然界の優勝劣敗、自然淘汰の現実への透徹した眼差しは、「忽ちに蟻集りてふつつかな蓑虫ひとつ攻め殺さむところ」（『菜切川』）や「死の中の生を見つけて野の鮑はしつて走つてまた死に遭遇す」（『鶯の書』）にも見られる。三首目では、築地作品の中でも大きなテーマである老いと死が歌われている。「死にきれぬ」が無惨に響くが、彼女は眼を逸らさない。見届けるのが使命というかのようだ。

自然の中でも慰まない孤独や断念の思い。自然界の個々の命が置かれている厳しい環境を知ることで一層深まる彼女の孤独感が活路を見出すとしたら、それは同じく何者にも頼らぬ生をひたすらに生きる者の姿にであろう。「生きの緒のぬきさしならぬ濃紫明日とはいはず今日の竜胆」（『花綵列島』）と歌われている竜胆の濃紫の凛とした鮮やかさ、即ち「明日とはいはず今日」を充実させる姿には、己の生に矜持を持つ者への共鳴と憧憬がこめられている。「生き耐へて来たるかたちにしづまりて冬の林がいま明るかり」（同）では風雪を経た林が擬人化されているが、「生き耐へて」とかなり感

情的な表現が撰ばれたことで、無言で清廉な個を保ち続ける樹々の姿に風格と気高さが備わっている。竜胆にも冬の樹々にも、かつて「麥の芽の光りかげりてそよぐ野よ孤りといふは陽のごとくあれ」（「短歌」1956年7月）と詠んだ、孤独を怖れぬ築地の美学が投影されている。

3 自在な視点と境地へ

農村での生活や日々が長く深くなるにつれ、築地正子は感覚の上でも理解の上でも届かない自然界の存在に気づいてゆく。

水のみが見たりし月もありぬべし朝素囊の水くつがへす（『菜切川』）

紫陽花の紫の裡けむりつつ心見せねばわれも見ざらむ

ぜんまいがゆるらゆるらに芽の渦をほどきゆくのはわが見ぬときか（『鶯の書』）紫陽花の歌は人間同士の関係を示唆するような比喩的な要素が強いが、引用の三首すべてに、対象と自分との心理的な距離感が詠まれている。そこにはどこか、断絶感というよりも、十全には分かり合えぬことを知った上でお互いの孤独を認めあう、穏やかさが感じられる。そして「見盡して見盡さぬもの花や知るまなこ昏むまで桜あかるし」（『鶯の書』）の佳作においては、見る者の側の孤独が鮮烈に歌われているが、ここではその作者の孤独ゆえに、桜の花の無心無情な明るさ、充実しきった個の輝きが映えている。歌人の心は、自らの眼が昏むかなしみよりも、花の明るさにうたれる歓びに満ちているのだ。

人間の思惑や理解を超越した自然界の奥深さや神秘、そして美に触れた歌人の思想は、第四歌集『みどりなりけり』における自在な自然観や生命賛歌に結実する。

一茎の荒地野菊が一行の詩句とぞなりて瞳にそよぐかな（『みどりなりけり』）

雪もまた遠来の客紅梅に斑鳥の肩にわが掌の上に

蝶の眼に見えてわが瞳に見えぬものこの世に在りて闇に入る蝶

一首目、築地は「一行の詩句」と野菊を見る。『花綵列島』に歌われた竜胆の激しさはないが、無名の野菊の持つ無垢な魂の静かな輝きが、生命の懐かしさと共に歌われている。二首目、この雪には、自然界の秩序がもたらす穏やかさや安心がある。遠い旅をして地上に至った命のように。三首目の蝶の歌は、集中の白眉である。何といっても結句の「闇に入る蝶」がこの歌の鍵だが、その結句の一瞬に作者と蝶の位置の転換が起きている。光と翳の交代、幻と現の鮮やかな交錯、蝶の眼でこの世が見えた一瞬である。

『みどりなりけり』の頂点を越え、第五歌集『自分さがし』では幽境と呼びたいくなるような作品が見られる。「みづからは光をもたず光りある月の存在のよきかな冬は」には、我執を離れた心が見せる、穏やかな共存者、同伴者としての月が描かれている。そして「つややかに野の鶯の鳴きたれば振り出しにもどるわが自然論」と再び鶯の姿が歌われ、築地正子の自然詠は自然界の営みの永遠性へと帰着する。

むすび

断念と断絶から出発した築地正子と自然との邂逅は、長い時間の中で豊かに発展していった。吉野昌夫の言葉を借りれば、築地正子は「媚びず怖れず」（「すばる」1998年6月）、「個」としての矜持を保ち、自らの「孤」を潔く受け入れた。彼女が自在な自然観を得、自然も彼女に奥行きのある、時に啓示的な姿を見せたのは、彼女が自らの思想を深めつつ、四囲の植物や生き物に常に誠実に己の魂を向き合わせて来たからであろう。

引用・参考文献

築地正子『築地正子全歌集』砂子屋書房、2007年。

伊藤一彦『歌の自然 人の自然』雁書館、2003年。

短歌雑誌及び同人誌（「短歌」「歌壇」「短歌研究」「すばる」「心の花」）既刊号